

武藤幸弘編

武藤幸弘編

一月一五日（日）

二〇二三年、令和五年。年明けがまだ二週間前というのがウソに思えるぐらい、身の回りで大小様々な事件が起こる。福男絡みで新人がテレビに見切れたらしいアンドウさんのところからは、仕事の相談がひっきりなしに飛んでくる。

おかげさまで日曜日だというのに、バイトの学生くんも入社してくれて、詰まり気味の仕事をどんどんこなしてくれている。しかし、このバイトくんもバイトくんで、話題を欠かさないサービス精神を持っていた。

「哲朗くん、本当に心理学部生になるの？」

「ええ、まあ」

哲朗は返事しながらも、目はモニターから動かさず、指はキーボードを叩いている。

「ちゃんどご両親に相談した？」

「ええ、まあ」

哲朗はさつきと同じトーンで間を置かずに返してくる。

「可能なら、大学院とかその先も考えてたり」

「カウンセラーとか、学者志望だっけ」

「人の根というか、気持ちを追究したくって」

哲朗の手が止まり、顔がこちらに向けられる。同時に「ご確認、よろしくお願いたします」と哲朗からのメッセージが飛んできていた。すぐに森田さんが反応を返し、チェックに入ってくれる。

「神学でも経営学でもないってところが、君らしいよ」

森田さんの〇が、とりあえず一案件ケリがついた。最終着地は明日で、最後に一悶着あるかもだけど。一息ついて身体を解している哲朗と、次の案件について打ち合わせを、と応接スペースに目をやると手前の席でMacbookを叩いていた香織が、少々強めにエンター機を押した。

香織は「ふう」と一息つくくと、自分の持ち込んだ荷物を片付けていく。炭酸水のペットボトルと自分のパソコン、電源コードをカバンに詰め込み、帰り支度を整える。自分のスマホを弄りながら顔を上げた。

「ルミちゃんが、お兄さんによろしくって」

香織はコートをハンガーから外しながら、自分の席に座ったままの哲朗の方を見る。

「次は哲朗くんだね」

哲朗は口角を上げながら、乾いた声で「お手柔らかにお願いします」と答えた。香織はコートを羽織り、カバンを手にオフィスを後にした。それを追いかけていた哲朗に視線を送る。iPadを持って立ち上がり、応接スペースを指し示す。

「打ち合わせ、良い？」

「ああ、はい」

哲朗はノートとペンを持って立ち上がる。応接スペースの椅子に向かい合って座る。iPadでブラウザを立ち上げ、見せたいサイトの読み込みを待つ。

「哲朗くん、誕生日いつだっけ？」

哲朗はペンをいじりながら、「今月の末、三一日です」と答えた。

「もうすぐだ。流石に誕生日ぐらいは帰るんだろ？」

「いやあ、先約が入っちゃって……」

目の前の青年は、香織への返事とあまり変わらないトーンで言う。母親譲りの柔和な雰囲気と優しいような目で、僕の説明を従順に聞いてくれている。

「俺、仕事、振りすぎてる？」

「いやいや、全然そんなことないです」

哲朗は手振りも添えて否定する。「むしろ、もっと振ってください。勉強になります」と付け加えた。

「本当にちゃんと帰るんで」

「そう？じゃあ、頼んだよ」

哲朗との打ち合わせを終えると、彼は自分の席へ戻って行った。新しい案件の資料を確認していく。彼の母親、明子さんからの連絡にどう返信するか考えながら、僕は自分の席に腰を下ろした。

初出 令和三年二月一七日 カクヨムにて公開

一月二七日（金）

「しつかし、森田さんは面白いよね。お付き合い始めて三年ぐらいになるけど、まだまだ色んなアイデアが出てきそうだよな」

アルコールが入って思いの外大声になっていた自分に自分で驚いている間に、向かいで顔色一つ変えずにグラスを傾ける浪川くんが「そうですね」と言いながら頷いた。隣で顔を赤くしながら黒ビールの入ったグラスを傾けていた新田くんが、グラスを置いて口を開く。

「チャットだめちやくちや硬いイメージでしたけど、あんなに熱い人だなんて知りませんでした」

「飲ませたらもつと面白そうなんだけど、まだ誘ったことないんだよねえ」

薄濁りのビールを飲み干した浪川くんが、「森田さん、下戸なんですか？」と訊いてくる。首を振って、「愛妻家のイクメンなんだよね」と返す。

「まだ下の子が小さくて、誘いにくくてさ」

浪川くんは「えっ？」と漏らして新田くんの方を見やる。新田くんは少々気まぐすうちに、「ウチは二人とも小学生だから」と切り返した。

「すぐ帰すから、もうちょっと付き合ってよ」

自分のグラスを空け、三人分のグラスをカウンターで返して、同じものを注文する。新田くんも、さつきと同じで良いという。自分のスマホを見ている浪川くんの頭頂部に、「君はどうする？」と声をかける。彼は、「自分で注文するんで大丈夫です」と答え、「すみません、ちょっと行つてきます」とスマホを持って階段を降りて行った。

注文を済ませ、大きい方のグラスを受け取って元の場所へ戻る。財布を出そうとする新田くんに、要らないと手振り以示す。

「すみません、お義兄さん」

「いや、もうただの仕事仲間だよ。慎一郎くん」

慎一郎は後頭部を指でかきながら、少し身体を小さくしてビールに口をつけた。僕は浪川くんの立っていた空間を見つめながら、自分が注文したIPAをグツと流し込んだ。慎一郎はポップコーンを摘んで、指先で転がした。

「香織は、元気ですか？」

「さあね。年相応にガタは来てるみたいだけど、大病はない、とは思う」

慎一郎も自分の家庭を持って長いだろうに、<sup>2</sup>年弱しか関係を持たなかった妹を気にかけてくれている。安藤さんのところに居ると聞いたときは、世間の狭さに驚いたっけ。

「で、彼はどう？」

そこにいない浪川くんを想像しながら、慎一郎に訊いてみる。慎一郎はビールを飲み、グラスから手を離して「優秀ですよ」と答えた。

「若くて優秀なだけに、危なげですけど」

「だから、人生経験豊富な君が相棒なんだろう？」

慎一郎は「自分なんて」と謙遜するが、少なくともウチの妹たちより遥かにマトモだ。彼にそう言われる浪川くんも、最近の哲朗を見れば、自分よりも有能なのはよくわかる。

下から冷たい空気をまとって、浪川くんが戻ってくる。彼の後ろから、背の高いモデルのような美女が姿を現す。少々意識の高い、立ち飲みクラフトビアバーとはいえ、流石に馴染まない。

「へー、立ち飲みなの？」

浪川くんの彼女らしい女性は、カウンターのメニューをじっくり読んでいる。隣で注文が決まるのを待っている浪川くんも、並んで立つと背の高さがよく映える。

「あれは相当優秀だぞ、慎一郎」

義理の弟だった男を見ると、彼は苦虫を噛みつぶしたような顔で、「ですね」と呟いた。

初出 令和三年二月一八日 カクヨムにて公開

二月六日(月)

「じゃあ、別に彼女ではないんだ」

応接スペースで普段より少し早い昼食を取っていた。向かいに座る哲朗は、父の買ってきたうな重に箸をつけている。「ええ、まあ」と口を隠しながら頷いた哲朗に、なぜか隣の親父は嬉しそうに微笑み、うな重の残りを掻き込んだ。

早飯が染み付いた彼は先に食べ終え、「ごちそうさまでした」と両手を合わせ、自分が散らかした食器を片付ける。自分で持ってきた紙コップと来客用のカップホルダーを組み合わせ、来客用の緑茶パックをあけてウォーターサーバーからお湯を注いだ。

「で、親父はいつまでいるんだ？」

「ん？」と特に悪びれる様子もなく、元の席に戻ってきた。カップホルダーに垂れた紐を数回上下させ、息を吹きかけて少し冷ますと、ズルズルと音を立ててお茶を啜った。

「昼休みが終わるまでには帰るさ。たまにはうな重も悪くないだろ、哲朗くん」

割り箸の入っていた袋から楊枝を取り出し、口の中を掃除しながら哲朗に投げかけた。哲朗は少々緊張した面持ちで「はい」と答えた。

「史穂さんのお遣いで弁当届けて、ついでに息子と飯食って帰るぐらい、いいだろう？」

「一応機密っていうか、セキュリティってのがあって」

「どうせ見たって、俺には分からん」

彼はそう言いながらも、応接スペースの書棚、オフィススペースの張り紙やポスターに視線を向ける。僕は父の持ってきた愛妻弁当を、向かいの哲朗は父と同じうな重を黙々と口に運ぶ。父の視線はいつの間にか、僕と哲朗に向けられる。

「そうやってると、本物の親子みたいだな」

「なあ、似てないか？」と電話番号をしてくれている香織に話を振った。香織は自分のMacから目を離し、こちらを振り向いた。

「智希に似てなくもないけど、他人の空似じゃない？」

「そうか。気のせいかな……」

息子の智希はどちらかといえば母親似。比較対象としてはズレている気もするが、血縁者からの否定は心強い。哲朗は少々面食らったように箸を止めていたが、香織の回答に納得する父を見て、箸を再び動かし始めた。

「あ、安藤さんからモデル選定の件どうですかって、メールが来てる」

香織がMacのモニターを見ながら言った。

「モデル選定ってなんだ？」

父の疑問に、香織がサッとチラシのラフ案を差し出した。コピーやレイアウトは概ね固まっているものの、肝心の写真がまだ入っていない、レンタル衣装屋のチラシ。ど真ん中に「和装モデルで」と安藤さんの指示が書き添えてある。チラシをじっと見ていた父は、急に視線を上げてこちらを見た。

「和装モデルなら、瑞希さんでいいんじゃないか？」

うな重を食べ終えた哲朗が、驚いた表情で父を見る。

「瑞希さんって、哲朗くんのお友達の……」

父は頷ぎ、胸ポケットから覗くストラップを引っ張ってスマホを取り出した。

「こんな娘だけ」と、昨日のサイゼリヤで撮ったらしい瑞希さんとのツーショット写真を画面に写した。

「何で親父が」という言葉を飲み込み、画面の中の女性をじっと見る。昨日は一瞬の余り印象に残らなかったが、程よい存在感と和装が似合いそうな顔立ちをしている。プロのモデルを使うほどの予算がないなら、ダメ元で頼んでみるのはありかもしれない。

「浪川くん経由で、色々頼んでみるか」

どうせなら、先日見かけたド派手な彼女と二人にすれば、いい塩梅で仕上げられるかも。弁当箱に残っていたご飯を掻き込み、昼からの展開に妄想を膨らませた。

初出 令和三年二月二〇日 カクヨムにて公開

二月一五日（水）

株式会社Zサイズの就業規定的には定時の一九時を過ぎ、いつものようにそのまま残業に突入するか、適当に切り上げて飲みに行くかというタイミング。今日は、応接スペースを少し拡げてお客様に座ってもらっている。普段は家で子供達と先に晩ご飯を食べている妻の史穂が隣にいて、その向かいに得意先の奥野さんが座っていた。

奥野さんは先日仕上がったばかりのレンタル衣装やのチラシを見て、後ろの哲朗たちの方を見る。哲朗は、チラシのモデルをやってくれた浪川瑞希さんと共に、目の前のモニターを見ながら楽しそうにやっていた。

「彼は、優秀なの？」

僕は打ち合わせ用のノートPCと、大きめのモニターを繋ぎながら答える。

「ええ。優秀ですよ。制作スキルは文句なしです」

ケーブルを繋ぎ、一度画面を閉じてモニターとノートPCの画面とを連動させる。テレビ会議用のアプリを立ち上げ、森田さんと小野寺さんにも入って来てもらった。

「お疲れ様です。急な声掛けで申し訳ない」

森田さんは自宅から、小野寺さんは摂津市のオフィスから参加してくれているらしい。

「僕と森田さんだけで完結しないかとも思ったんで、小野寺さんもよろしくお願いします。早速なんですけど、送ったやつ、見てくれましたか？」

打ち合わせが始まる前に、Slackで動画のURLを送ってあった。少しの遅延を挟んで、森田さん、小野寺さんがほぼ同時に「見ました」と答えてくれた。奥野さんの自宅サロンを題材に、彼女の娘の沙綾さん、瑞希さんとが作ったショートムービー風の体験映像。

「レポートはほとんどないですよ？ PRというか、Youtube動画的に埋もれないかが心配ですね」

「私は好きですよ。海外から見た日本みたいな感じだし、チャンネルとロゴがコピトカバっていうギャップも可愛くて」

森田さんの懸念、小野寺さんの感想、どちらも正解だろう。ロゴ関係は、瑞希さんの兄、一輝さんに作ってもらった、可愛くもシンプルなシンボリックなイメージ。

「再生数とかチャンネルが伸びるかは、瑞希さんと哲朗くんに悩んでもらおうと思う」

実際に、瑞希さんたちのバックアップ、Web周りのマーケティングやブランディングは全て哲朗に丸投げしてある。沙綾さんがインフルエンサー、モデルとして伸びれば、その底上げも期待はできるだろう。

「問題は、新機軸のマーケティング施策、プロモーション施策が考えられないかなと思わせて」

奥野さんが議論をすつ飛ばして、少々強めのボールを蹴って来た。森田さんは「あ、動画の話じゃないんですね」と軽くトラップしてくれる。

「こういう動画をどんどん作ってもらったり、お友達を紹介したりするのは問題ないんだけど、こういう取り組みをさらに生かす、お互いによりWin-Winになる仕組みが構築できればもつと良いのになあ、と思ったんですが……」

奥野さんの起業家仲間、小野寺さんの繋がり、動画を使ったマーケティング、プロモーションを重ねていくのは可能だろうし、機材やスタッフを追加して映像そのもののクオリティも上げられるだろうけど、それだけでは少し物足りない。確かに、それもよく分かる。

「今まで、アンドウさんと小野寺さんのところでやっていただいた施策は今後もお願ひするんだけど、それとは毛色が違うような気がして」

「で、アイデアなりコンテンツなりを小野寺さんも巻き込んで考えたい、ってことですか？」

「ま、そういうこと」

森田さんはかなり深刻そうに「うーん」と唸り、小野寺さんも小野寺さんで難しそうな顔をしている。

「若人と地域のお客さんのために、ゆっくり知恵を捻ろうじゃないか」

僕の言葉に、森田さんはまだまだキツそうな表情を浮かべている。会議はさつき始まったばかり。とりあえず、たっぷり二時間やろうじゃないか……。

三月四日（土）

土曜の朝一〇時過ぎ。久々に一日オフの予定が、今日は少々重い足取りで自分のオフィスにたどり着く。扉の向こうから、FM802のパーソナリティが番組に届いたお便りを読み上げているのが聞こえてくる。

「おはようございます」

オフィスに入ると、土曜日出勤の哲朗が挨拶してくれる。普段は香織が座っている席から、今日は浪川さんが顔を覗かせた。彼女も「おはようございます」と声をかけてくれた。二人とも不思議そうな顔をしていたが、僕が自分の席に荷物を置き、端末を立ち上げながらコートを脱ぎ始めると、浪川さんは目の前のモニターに視線を移し、自分の作業に戻っていった。

哲朗は自分の席を立ち、僕にコーヒーを入れてくれた。

「今日、お休みでしたよね？」

「娘にフラれてね」

コートのポケットに突っ込んでいたテーマパークのチケットを、積み上げた資料の上へ適当に置いた。中で遊ぶには別料金がかかるらしい、「入園無料」の券。「要る?」

二枚揃えて哲朗に差し出す。彼は「今月末まで」と書かれたチケットを受け取り、「じゃあ、遠慮なく」と言った。

僕らが二人で立ち話をしていると、浪川さんが哲朗を呼んだ。

「コレでいい?」

哲朗はモニターを見て、「うん、OK」と答えた。

「一応、Slackのコメント残しておこう」

「りょうかい」

「じゃあ、次は画像の差し替え頼んでもいい? コレなんだけど」

哲朗はモニターにSlackを表示して、該当のチャットを開いた。年度末に合わせた画像変更の依頼を、浪川さんのマウスを横から取って説明していく。

「浪川さん、できるんだ」

「立命の映像なんで、簡単な作業は」

哲朗は浪川さんにマウスを返し、彼女は楽しそうに作業へ入っていく。

Windowsの操作感に戸惑いながらも、テンポよくリネーム作業を進めている。

「て、すみません。勝手に」

「いやいや、助かったよ。浪川さん、後で書類とタイムカードだけ」

顔をこちらに向けた彼女に、空中で物を書く仕事をすると「はくい」と明るいい声を返してくれた。「ひと段落ついた時とか、お昼休みでいいからね」と声をかけ、自分の席に戻ってSTACKを確認する。年度末のテキスト変更やら画像差し替えやらがそれなりの速度で片付いていつてる。

哲朗は、顧客から届いた書式がバラバラのデータを整形してくれているらしい。じゃあ、僕は未着手のLPとCMSのカスタマイズでもやろう。昨日、確認を依頼した件のフィードバック、修正もさつきと片付けたいが、アレは週明けまで動かない。作業用のアプリケーションが立ち上がる間に、スマホに通知が届いた。妻の史穂と、長女の陽菜が神戸南京町で水餃子を啜っている写真だった。

朝はかなり不機嫌に見えた陽菜の表情が、随分と和らいで見える。娘とのデータが流れたのは寂しいが、楽しそうならそれでいい。

肉まんと月餅を買って帰るように頼むと、夕方にはオフィスに立ち寄ると返ってきた。哲朗と浪川さんの分も頼んでみた。年度末の追い込み、気合を入れて片付けますか。

初出 令和三年三月二日 カクヨムにて公開

三月二十八日(火)

メールソフトの受信箱を手前に出しながら、右下の時計に目をやるとそろそろ一九時。「お先く」と香織がお気楽そうにオフィスを出たのが一七時半。哲朗と浪川さんに「まだ、帰らないの？」と声をかけ、二人を引き連れて帰ろうとしたのを途中で止めたけど、これで安藤さんから返事が帰って来なければ、この九〇分はムダになるかもしれない。

哲朗と浪川さんは、コビトカバチャンネルの新しい動画編集に勤しみ、次の動画をどう構成するか、どう発信していくかを話し合っている。哲朗はラジオの時報に顔を上げ、壁際の時計を見た。

「小腹空くよね？　なんか食べる？」

彼は財布から一〇〇円玉を取り出し、目ぼしいものはほぼ全滅したオフィスグリコの前へ行く。浪川さんは彼の隣で中を覗き込むが、やっぱり目ぼしいものはないらしい。「やっぱりいいや」と言わんばかりに首を振ると、二人揃って今まで作業していた机に戻っていく。

二人の動きをぼんやり眺め、一九時台の番組が始まったラジオに耳を傾けていると、視界の隅で、未読のマークがついたメールが届いていることに気がついた。安藤さんから届いた、件名に「Re」がついた回答メール。

哲朗の視線がこちらに向く。彼も、今のメールを見たようだ。ゆっくり頷くと、彼は大きく息をついた。

「哲朗くん、浪川さん。本当に、お疲れ様でした」

席から立ち上がり、二人に向けて頭を下げる。

「さ、今日はもう上がるう」

僕の号令に、二人は今までの作業を止めて、帰り支度を始めた。動画をアップロードしている端末には「そのままOK」を出して、付けっぱなしのラジオと空気清浄機を落とし、浪川さんにはタイムカードを押してもらった。

僕も僕で荷物を鞆に詰め、久々に社内用のサンダルから、外履き用の靴に履き替える。戸締りを確認して、二人に「忘れ物、大丈夫？」と念を押す。二人がそれに頷いたから、鞆を持って、オフィスの外へ出た。照明を落として、セキュリティ

ティをONにして、鍵をかける。

前を歩いていた二人がエレベーターを呼んで待つてくれていた。哲朗がドアの前に立ち、ボタンを操作してくれる。

「で、二人はこの後どうするの？」

「僕らはもうちよつと、打ち合わせしていきます」

「そう？ 晩飯なら奢るけど」

「いや、武藤さんは帰れる時に帰った方がいいですよ」

哲朗に反論しようと思ったのに、ビルの外に出たら、二人に「お疲れ様でした」と頭を下げられたら、一人で帰路につく他ない。哲朗と浪川さんは、最近見せなかった「ふたりの世界」な雰囲気を漂わせ、僕を置いてさっさと阪急の駅の方へ歩いて行った。

「オレもそつちに帰るんだけどなあ……」

僕の眩きは、幸せいっぱい歩く二人の背中には届かない。あつという間に彼らは商店街の方へ曲がる。僕は二人の後を追いかけるようにトボトボと足を動かす。

久々に忙しかった年度末。身も心も精一杯でやり切った達成感を味わいたかったけど、今日は寄り道せずに帰るとしよう。

初出 令和三年四月二六日 カクヨムにて公開

四月一八日(火)

今月に入ってから、平日の日中はオフィスから人が減ってしまった。先月までは一緒にランチを取ることもあった哲朗も、仕事はすっかりリモートになってしまつて、土日あまり顔を見せてくれない。

森田さんも、年度末の繁忙期を乗り越えたら、来社の頻度が減ってしまった。

結局、うちのオフィスで仕事をしているのは、基本的に僕と香織。時折、Youtubeへの動画をアップロードするのに、安定している回線の方がいいからと哲朗、浪川さんの二人がやってくる程度。

そんな二人が管理するYoutubeチャンネルの、非公開動画のURLがSlackに流れってくる。最近彼らや、取引先の小野寺さんらとやっている自主練ダンスの振り返りが主目的の動画だ。浪川さんがカット割りも考えて編集して、かつこい動画に仕上げたつていいのに、彼女もしっかりダンスに参加して、彼女のなりの動きで元ダンス部の皆さんに食らいついていつてるのがとても微笑ましい。

今回共有されたのは、先日の日曜日に行われた自主練の映像。ちよつぴり高めの画角は哲朗だろうか。鏡越しに親父の姿も見える。小野寺さんのもつてきた音源に合わせ、彼女と彼女の友人とを筆頭に、浪川さんと陽菜がその後ろに立つて動きをトレースしていく。

一輝くんと彼の連れ合い、沙綾さんは不参加らしい。見栄えのする動きは主に前の二人。浪川さんは少々悪目立ちする感じで映っていて、陽菜のダンスは浪川さんほど悪くはない。体育の授業でダンスを選択していたんだっけか。それなりに、とかどうかどうしても気になって追いかけてしまう。

「うわあ。お父さんがそんな目で必死に見てるって知ったら、またややこしいことになりそうだな」

隣で僕のモニターを覗き込みながら、香織は嫌味な笑みを浮かべ、ふざけたトーンで言う。

「でも、コレいいね」

「お宅の里紗も参加するかい？」

「おじさんたちの邪な目で見られちゃ叶わないから、結構です」

中学校で水泳部に入ったらしい姪っ子の、地上でのバランスを整えるのにも良さそうだけど、ほぼ身内とはいえ、第三者に見られるのは確かに嫌がるかもしれない。そういう意味合いでは陽菜も似たようなもんだけど、久々に元気よく動く娘の姿が見れた喜びの方が僕の中では大きい気もする。

「コレが沙綾さんね。おー、すごいすごい」

香織は一つ前の動画を開いて、沙綾さん、小野寺さん、小野寺さんのお友達の三人だけで踊っていた冒頭の部分を、目を丸くしてジッと見ていた。単純にダンスの動きとしては三者とも大きな差はないように思えるが、中央の沙綾さんにとっても目が行く、少し違って見えるのは表現力の差なのだろうか。単なる見た目、迫力だけの問題ではなさそうだ。

「沙綾さんも参加する回なら、里紗も行きたがるかもね。久々に陽菜ちゃんにも会える、とかはしゃぎそう」

そう言われると、陽菜があまり家族の行事に参加しなくなったせいで、彼女と里紗、啓が顔を合わせる機会も減っている。智希と啓は男同士で楽しそうにしているが、里紗はちよつぱり寂しそうにもしていたな。

SlackのDMで哲朗に、「沙綾さんが参加しそうな日って、分かる？」と打ってみた。彼女のファンらしい彼の妹にも、明子さんを通じて伝えてもらおうか。哲朗からの返事を待ちながら、既定の昼休みがもう間も無く終わることを思い出し、すつかり伸びきったカップ麺に箸をつけた。

初出 令和三年五月六日 カクヨムにて公開

五月七日(日)

土砂降りの雨の中、オフィスに赴いて端末を立ち上げてみたものの、何らかのレスポンスがあるはずもなく、世間は当たり前のようにゴールデンウィークを楽しんでいるらしい。受信ボックスを確かめても、Stackを立ち上げても、目ぼしい未読は見当たらない。

椅子の背もたれにグツと体重を預け、モニターを付けっぱなしにしたまま目を閉じる。普段はラジオの音やら、電話のコールやらが聞こえてくるのに、今日は空気清浄機の音が微かに聞こえるだけ。窓の外から聞こえてくる雨の音、表通りを走る車の音が心地よく混ざり合う。

目を閉じて、雨の音に耳を濟ませる。音に誘われてゆったり船を漕いでいると、だんだん大きくなってくる足音が聞こえてきた。どうやら、誰かがドアの向こうで立ち止まったらしい。立ち止まった誰かはドアを開け、明かりをつけた。

「おお、哲朗くん」

急な明るさに目を細めながら、身体を起こす。呼びかけられた哲朗はビクツとして、こちらを見た。

「何だ、社長か」

「何だとは、何だ」

哲朗はへらへら「すみません」と笑った。自分の席へ行つて、端末を立ち上げる。

「ゴールデンウィークの最終日なのに、『こんなところ』で居眠りですか？」

「そういう君の方こそ、『こんなところ』に何の用だ？ 一朗さんの祝勝会ぐらい、出たんだろうな」

「多選の地方議員なんて、一々祝つてられませんよ」

端末が立ち上がると、哲朗は早速自分の作業に取りかかった。その口振りでは、この連休も実家には帰っていないようだ。例の練習動画には彼の妹の姿もあったから、あちらからは来ているようだが、明子さんからも特別にメッセージが飛んできている気配はない。

「何か、仕事頼んでたっけ？」

彼はモニターを忙しそうに眺め、何度かマウスをクリックした。「いや、特にはなさそうですね」と、手にしたハードディスクを差し込んでいる。

「明日からまたしばらく来れそうにないんで、持ち出しちゃってもいいですか？」  
「ああ、いいよ」

どうせ、機密らしい機密も大してない。彼の出先で開かれて困るような資料、データも特にない。彼は手早くマウスを動かし、必要なデータを移していく。代わりに、Youtubeへの動画アップロードも進めているようだ。

「この間の、茨音はどうだった？」

「社長は見えてないんですか？」

「現場にはいたんだけどね。本部でバタバタしてたからさ」

彼は手元のハードディスクに手をやる。

「今ちようど、その映像をアップロードしてますから、あとでまた見てください」  
「え、もう編集も終わってんの？」

哲朗は頷いた。

「ちゃんと、浪川瑞希の監督、編集で見応えある動画に仕上がってます」

いつもの練習動画は撮ったままの映像だったけど、今回はしっかり手を加えたようだ。何やかんやで監督も急遽でステージに上らされたのに、事前にきっちり連携取って、過不足なく撮れたのだろうか。

「それは楽しみだな」

哲朗は「今回ののは、公開してもいいレベルです」と力強く頷いた。公開、は二の足を踏んでしまうけど、いい酒が飲めるかもしれない。「どうだ、哲朗くん」

この後、一杯行かないか？」

「すみません。この後、予定があって」

彼は申し訳なさそうに軽く頭を下げた。

「忙しいねえ。さすがは、できる男」

彼は「いえいえ、そんな」と言いながらも、満更でもなさそうな表情を浮かべている。頼もしくもあり、末恐ろしくもあり。前途洋々の若者を見守りながら、この後どうしようか、思いを馳せた。

初出 令和三年五月一四日 カクヨムにて公開

五月二五日（木）

この間、年が明けたと思つたら、あつという間に桜が散つて、もうそろそろ梅雨入りだのなんだの。季節感があるようで微妙にない仕事をしているが、寝苦しさど湿気には夏を感じる。

エアコンのタイマーが切れると同時に、何となく目が覚めてしまった。トイレに行き、戻り際に暗がりのキッチンで麦茶を飲んだら、もう一回ベッドに入る気は何処かへ行つてしまった。早々に寝間着から着替え、顔を洗う。キッチンに戻つてお湯を沸かし、インスタントコーヒーを淹れ、ささやかな書齋に持つて入った。パソコンを立ち上げると、時刻はまだ四時。まだまだ外は暗く、仕事のメールやチャットをのんびり確認していると、新聞配達の声が聞こえてくる。雨脚が弱まってきたとはいえ、昨日から降り続けている雨の中、大変だなあ。

今日の予定は、安藤さんのところへデータの納品。昨日、雨の中濡れないようにハードディスクを持つて帰つてきたけど、それを持つて行くついでに打ち合わせ、だったっけ。忘れないように荷物も確かめておかないと。

書齋でのんびりやっていると、寝室の方から耳慣れたアラーム音が聞こえてくる。史穂は今から、お弁当の準備らしい。足音がキッチンへ降りていき、階下から賑やかな音が聞こえてくる。

しばらくすると、今度は陽菜の部屋からスマートフォンのアラームが聞こえてくる。まだ朝の六時にもなっていない。一回でアラームを止めたらしく、彼女の足音は書齋の前を通り過ぎて階下へ向かった。風呂場の方から、シャワーを使う音が聞こえてくる。

僕はコーヒーを飲み干してからになったマグカップを手に、彼女らの邪魔にならないよう、そーっと階段を降りる。キッチンで史穂に「おはよう」と声を掛けると、驚かれてしまった。

「今朝は随分、早いよね」

彼女は寝間着姿のまま、手を一切緩めることなく僕にいった。僕はポットを指して、「お湯、もらつてもいいかな？」と聞くと、彼女は一瞬思考を巡らせてから、「どうぞ」と言った。

新しいインスタントコーヒーを入れてみると、シャワーから上がった陽菜がまだ濡れたままの髪を拭きながらキッチンに入ってくる。彼女は僕を見ても何も言わず、冷凍庫から食パンを出してトースターに放り込んだ。僕から彼女に「おはよう」と声をかけると、小さな声で「おはよう」と返ってきた。彼女は自分のマグカップにお湯を少し入れて温め始めると、再び脱衣所へ戻って行った。今度はドライヤーの音が聞こえてくる。

「いつもこんなに早いんだっけ」

「今日は電車だからじゃない？」

史穂は陽菜の小さな弁当を詰め終わると、テレビを付けた。天気予報では、雨は朝のうちに止むらしい。

「自転車は昨日、学校に置いて帰ったんだって」

史穂の言葉に、昨夜の雨を思い出す。合羽なしにあの雨の中を、一時間ちよつと自転車というのは確かに辛い。相当な早着替えで、制服に着替えた陽菜がキッチンに戻ってきた。少し焼きすぎたトーストを皿に乗せ、イエローラベルのティーバッグをマグカップに入れてお湯を注ぐ。彼女は一人、「いただきます」とパンにかじりついた。

史穂は横にヨーグルトとスプーンを出し、シンクの洗い物を片付けていく。

「良かったら、送るぞ」

「いいよ、恥ずかしいし」

即座に申し出を断られた。

「アプロの駐車場とか、コンビニで降りれば大丈夫だろ？」

石橋の駅まで送ってそこからバスに乗り換えるより、同級生に見られにくいだろう。もう少し坂の上に行つた渋高側の広い場所でもいい。陽菜はパンをかじりながら、何やら思案している。

「じゃあ、俺も荷物取ってくるから、考えといて」

僕はマグカップのコーヒーを飲み切り、書斎へ向かった。大事なハードディスクもカバンに詰め込み、指差し確認も怠らない。まだ少し早い気もするけど、朝から娘とドライブだ。荷物をリビングに運び、洗面所で歯を磨く。久しぶりにヒゲも剃ろうか。

六月九日（金）

スケジュール調整の結果だから仕方ないとはいえ、よりによって笠井さんに来社いただくタイミングで、オフィスの片隅で賑やかに打ち合わせしているのはよろしくない気がする。

うちのオフィスに人が集まってくれるのはありがたいことではあるものの、人員拡充の前に手狭になりつつあるのは早めに何とかしなくては。今更レイアウト変更っていうのも大変だよなあ、とか思いつつ、笠井さんが資料チェックし終わるのを黙って見守る。

「うん、コレで良いんじゃないですかね」

笠井さんは顔を上げ、胸ポケットに刺した赤いサインペンのキャップを外した。下の方にある合計人数に丸をつけ、僕の方に差し出した。

「参加人数が前回よりかなり増えるようなので、我々は最初と最後でご挨拶に伺うだけにして、あとは邪魔にならないようにハケておくようになります」

「なんか、すみません。主催していただいて、会場の手配もお願いしてるのに」

「いえいえ。皆さんが交流を深めていただいて、それで経済が活性化するのなら、どんどん無理を言ってくださいよ」

笠井さんの漢気に、自然と頭が下がる。

「じゃあ、コレで小野寺さんにも共有しておきますんで」

「何卒、よろしくお願いいたします」

より一層深々と頭を下げる。笠井さんは涼やかな微笑みを崩さないで、眠気を誘うような穏やかな声で「頭を上げてください」と言った。彼は資料をクリアファイルに入れ、カバンにしまった。

「こちらのオフィスも賑やかになってきましたね」

「最近若い奴の出入りが増えて、良い溜まり場にされてるんですよ」

笠井さんの視線が、歓声が上がったオフィスの一角に向けられる。さつき、ボリウムを下げてくれとお願ひしたのに、興奮冷めやらぬのか、また大きな声で喧々諤々とやり合っている。

「電話の呼び出し音が一番大きく聞こえるうちのオフィスより、全然マシですよ」

「笠井さんのところは静かでしょう。最近は静かなのも、味わいたいぐらいです」  
笠井さんは腕時計に目をやり、手元に鞆を引き寄せた。時刻はそろそろ一八時。  
「このあと、帰社ですか？」

「ええ。一応、いただいた資料を取りまとめたりしなきゃいけないんで」

「せっかくの金曜日なのに、ご苦労様です」

「そっか、金曜日か……」

笠井さんはカバンの中身を何度か見て、スマホの画面でも何かを確認している。  
僕は事務所の冷蔵庫を開け、三五〇㉓の缶ビールを二つ取り出して、応接スペースに戻った。

「じゃあ、ココでちよつと飲みませんか？」

笠井さんの顔が、ちよつぴり綻ぶ。さつきは、鞆を抱えて立ち上がりとしていたのに、迷うことなくカバンからサツと手を離して、椅子に座り直した。

「じゃあ、一本だけ」

「さすが笠井さん、そうこなくっちゃ」

僕は笠井さんの前に一本置き、自分の缶ビールを開けた。吹き出した泡がこぼれないように、口から迎えに行く。顔を上げると、向かいの席で笠井さんが同じポーズを取っていた。笠井さんはこぼさないように缶を持ち替え、空いた手でスマホを操作した。

「なんて打ったんですか？」

「ちよつと打ち合わせが長引いてますって」

笠井さんの顔に、ちよつと緩めの微笑みが戻る。さすが笠井さん。僕も彼みたいなやり方を見習わなくては。

初出 令和三年五月二一日 カクヨムにて公開

七月五日（水）

午前八時前に送ったメッセージが、未読のままになっている。普段なら即レスがあってもおかしくない時間帯なのに、三〇分以上返事がないどころか、未読のままということは、やはりまだ寝ているのだろう。

道中のパン屋で包んでもらった紙袋を片手に、出来るだけそつとドアの鍵を開ける。セキュリティにも変に反応されず、とりあえず胸を撫で下ろして自分の席に荷物を置いた。応接スペースを覗くと、椅子を連ねて横になっている哲朗がいた。寝息を立てている姿は可愛らしくも見える。

彼の額には、綺麗な字で書かれた上坂さんからのメッセージが貼られていた。どうやら彼女は、始発で一度自宅に帰ったらしい。「今日も学校で」というところに、底知れぬ若さを感じる。

しかし、二人で一夜を明かしながら、それにしても小綺麗な状態で入り口の鍵が降りていたということは、上坂さんが帰るまで彼は起きていたということだろうか？ 交代で仮眠を取ったのであれば、この熟睡も仕方ない。

せめて、旨いコーヒーでも入れてやろう。ポットに給水してスイッチを入れる。コポコポと静かに湧き上がるのを待ちながら、哲朗の寝顔に目を向ける。思春期になってからは、身体つきも顔つきも一朗さんの遺伝子が顔を覗かせてきたが、顔のベースは妹の美桜ちゃんより明子さんに似ている。顎のラインや目元なんかはそっくりだ。

スマホのカメラを立ち上げて、出来るだけ息を潜めながら、画面を近づける。もう少しでいい感じの画角になりそうなところで、哲朗は目を開けた。反射的に体を動かしてバランスを崩し、椅子が好き勝手に散らばった。上に乗っていた哲郎の体は、背中から床に叩きつけられた。

彼は「いたた」と背中をさすりながら、僕を怪訝な面持ちで見ってくる。

「なんですか、いきなり」

「可愛い息子の寝顔を送ってやろうと思ってね」

サツとシャッターを切ったのが功を奏したらしく、少し小さいが鮮明な画像が撮れた。彼はなおも何かを言いかけたが、目の前に手をやり、おでこに貼られた

メモに視線を向けている。その間に、サッと明子さん宛に写真を送ってしまおう。

「送信完了」になったのを確かめて、コーヒーの準備に戻る。彼の朝食用に買ったパンも応接スペースに持っていく。彼は椅子と服とを直し、改めて腰掛けた。

「目は覚めたかい？」

「ええ、まあ。なんとか」

彼はまだ目が開ききらない様子で、のんびりした動きでコーヒークップを口元に運ぶ。「いただきます」と口に出してから、パンをもそもそかじり始めた。

「今日も講義あるんだって？」

「そうなんですよ。午前中に必修科目があるんで」

彼はスマホを操作しながら、僕の問いかけに応答する。スマホを触る指を止め、僕に「冷蔵庫を見てもらってもいいですか？」と言った。言われるままに冷蔵庫を開けると、見覚えのない眠気覚ましドリンクが一本入っていた。

「随分、愛されてるじゃないか」

僕はそれを差し出すが、彼は少々苦い笑みを浮かべて、「そうなんですかね」と困ったように言う。

「とりあえず一回帰って、登校します」

受け取ったドリンクをグッと呷り、「朝食ご馳走様でした」と礼を述べると、荷物をまとめて慌ただしく帰り支度を整える。ほぼ徹夜だろうに、この後は風呂に入って、着替えて、学校か。

オフィスを出ていく背中に、「気をつけてな」と声をかけるのが精一杯だった。

初出 令和三年七月一七日 カクヨムにて公開

七月三十一日(月)

香織に頼んだ昨日、一昨日のデータ入力を確認していると、香織が僕の後ろを見やり、「あら、森田さん。こんにちは」と声をかけた。昨夜もいばフェスの会場で会ったはずなのに、蛍光灯の下で見る顔の黒さに少々驚いた。

挨拶も程々に、香織にお茶を入れてもらうように頼んで、森田さんと共に応接スペースへ移動する。

「月末の月曜日に時間とつてもらって、ゴメンね。今日も、例の撮影？」

彼は頷きながら、「今日というか、昨日の深夜から今朝の早朝までですね」と言った。

「じゃあ、昨日、あの後から？」

「子供らのお風呂と寝かしつけもやってから、ですけどね」

「さすが森田さん、お義姉さんに任せっきりのウチの兄貴とは全然違うわ」

香織は、グラスに氷も入れたアイスコーヒーをコースターと共に森田さんの前に置いた。ガムシロップとフレッシュも手元に置こうとするが、彼は「ありがとうございます」と言いながら、ストローだけ受け取った。

「そのまま起きっぱなし？」

「いいえ。明け方に撤収して、家に帰ってから仮眠、お見送り、二度寝でココですよ」

先に寝ている奥さんを起こさないように帰宅して、朝は普段通りの時間に起きて食卓についている彼の姿が容易に想像できた。

「じゃあ、銀行回りは今からだ」

森田さんは「そうなんですよ。とにかくバタバタで」と言いながら、グラスにストローを刺してコーヒーに口をつけた。彼がチラリと目をやった時計を見ると、そろそろ一三時を指そうとしている。あんまり、のんびりやらない方が良さそうだ。

僕は早速タブレットを操作して、カレンダーを表示する。

「例の親睦会、この辺の日程でどうだろう？」

明日から始まる八月、二週間先の週末あたりから「夏季休業」のスケジュール

が入っている。僕はその前を指しながら、空中にペン先で細長い円を描いた。天候に恵まれず、本腰を入れて撮影に入れなかった梅雨がようやく明けたのに、親睦会やお盆休みやらで水を差すのも何となく気が引ける。

ただ、最初からこういうスケジュールになることも織り込んでいた森田さんは、顔色一つ変えることなく、「五日の土曜日か、お盆休みですけど、その次の一二日の土曜日です？」と言ってくれた。

「次の週末となると、ちよつと急な気もしますけど」

「そうだね。その代わり、お盆となると、来れる人が限られちゃうか」

僕の言葉尻を捉えて、森田さんは「それは、お盆じゃなくても同じですよ」と突っ込んだ。確かに、そりゃそうだ。

「じゃあ、第一、第二で候補にしておいて、調整しようか」

「それでいいんじゃないですか？」

誰が来るのか、最終的に何人になるのかも、我々だけではどうせ分からない。他の候補日も加えて、後は全員に都合を聞いてみよう。家族連れも参加OKにしておいて、山の方のキャンプ場を借りるか、万博公園辺りのBBQ会場を予約するようにしよう。

ザックリとしか決まっていなかった親睦会が、森田さんの提案によってどんどん方向性が定まっていく。半分休みのつもりでゆるゆる仕事をするつもりだったのに、何だか、やる気まで湧いてきた。

初出 令和三年九月一〇日 カクヨムにて公開

八月一七日(木)

日が落ちて、ようやく空が濃い紺色へ変わっていく。これで日中の暑さももう少しマシになれば最高なだけけれど、今夜も相変わらず、寝苦しそうだ。冷房と外の空気が混ざり合って、なんとも言えない微温さを味わいながら、まだ微かに冷たいビールを飲んだ。

向かいの席に座る哲朗は、色が違うビアカクテルに口をつけ、満更でもなさそうな顔をしている。隣に座っていた森田さんは、控えめなペースでグラスを傾けていた。

「強引に付き合わせちゃって、ごめんね」

僕の言葉に、森田さんは「いえいえ」と微笑んだ。

「たまにはこういうのも必要ですから。向こうは向こうで、お義父さん、お義母さんと美味しいもの食べに行くって言ってましたから」

森田さんは笑いながら、自分の前にあるハンバーグにナイフを入れる。なんとなく遠慮がちな動作で口へ運んだ。

哲朗は楽しそうに生ハムを二、三枚を箸で取って食べた。さつき運ばれてきたばかりの緑のビアカクテルを飲み切って、ドリンクメニューを開いている。

「お盆も全然帰らなかったんだって？」

僕の問いかけに、哲朗は顔を上げることも、返事をすることもない。メニューに目を落としたまま、「どうしよっかな〜」と呟いている。

「この間のパーティにはいましたよね？」

森田さんはビールで口を湿らせ、哲朗の横からドリンクメニューに目を走らせる。珍しくスーツで着飾っていた哲朗を見たのは、先週のことだった。森田さんも会場にいたんだっけ。

僕が「どうやら、あの時だけだったらしい」と言うと、森田さんは「へー」と半ば驚いた様子で声を上げた。「もつと帰って、親孝行した方がいいよ」と付け加えながら、森田さんはワンサイズ大きめのビールを頼んでいた。

「必要なタイミングで帰ってますよ。勉強と仕事で暇がないだけです」

哲朗は顔をほんのり赤らめながら、シャンデイガフを頼んだ。

「じゃあ、来月の連休には帰れるよな？」

僕は若干嫌味なトーンを込めて言った。哲朗は肩を竦めただけで、明言を避けた。

「ま、程々に」

森田さんの優しい声かけには、素直に「はい」と答えた。

「哲朗君が近くにいるくれる安心感ありがたいし、心強いじゃないですか」

「実家も全然近いんだけどね」

「それも、そうなんですけど」

森田さんは乾いた笑い声を響かせながら、テーブルに運ばれてきた新しいビールに口をつけた。哲朗は僕たちのやりとりを気にすることなく、一人で飲んで、一人で食べている。

「兎にも角にも、二人にはますます頼っていくから、よろしく頼むよ」

森田さんは力強く頷いてくれたが、哲朗は僕のことなど眼中にないらしく、とにかく飲んで、食べてを繰り返している。難しい話、ややこしい話はもう十分だ。そっちがそのつもりなら、こっちも付き合っただけでやる。

森田さんにドリンクメニューを取ってもらって、-half & halfに決める。豪快に食べる哲朗に合わせ、つまみも何か追加しよう。とりあえず、サラダは頼んでも良さそうだ。手を上げて、店員さんと呼ぶ。

明日のことも頭に片隅に入れつつ、今日はとことん飲んでやる。

初出 令和三年一〇月一日 カクヨムにて公開

九月五日（火）

「じゃあ、二九日はよろしく頼むよ」

向かいに座っていた哲朗は、自分のパソコンを触りながら頷いた。彼の隣に座っている上坂さんは、自分のスケジュール帳にペンで何かを書き込んでいる。

「浪川さんは来れないんだよね？」

哲朗は「彼女は、衣笠キャンパスなんで」と応えた。キャンパスが離れているとはいえ、まだまだ後期の履修登録の時期だろうに。茨木キャンパス組の彼らだけピックアップして、明子さんの誕生日パーティに連れていくのはなんとなく引つかる。

「じゃあ、これで上坂さんの一歩リードだ」

「でも、瑞希さん、明子さんに会ったことあるんでしょ？」

香織はコーヒーを自分のカップに注ぎながら、僕の後ろから声をかけた。僕は、少々驚いて、「え、そうなの？ 初耳なんだけど」と言った。

「え、知らない？ 随分前に本人から聞いた気がするけど」

香織は立ったまま一口飲んで、スツと自分の仕事に戻った。半ば事務員的に僕よりオフィスに多いことが多い彼女は、僕よりはるかに社内の事情に通じているのかもしれない。

斜向かいの上坂さんの表情が僅かに曇った。

そんな話を微塵も出さなかった哲朗も哲朗だけど、水面下で情報共有もしてくれなかった明子さんも明子さんだ。信頼されているのか、いないのか、彼の後見人を今後も名乗るには自信がなくなってきた気もする。

哲朗は周りのことなど一切気にすることなく、自分のパソコンを見ていた。壁の時計を確かめて、「じゃあ、僕はもう出ますね」と腰を上げた。彼は自分の席に戻って、荷物を詰め始める。備え付けモニターの電源を落とす。

彼はカバンを肩にかけ、「今日はもう戻ってこないんで」とオフィスを出て行った。僕は一拍遅れて、その背中に「おう、了解」と言葉を投げた。

僕も自分の仕事に戻るべく、椅子から腰を上げる。上坂さんは同じ椅子に腰掛けたまま、スケジュール帳を脇に寄せてカバンの中を探っていた。

「次の打ち合わせまで、ここで作業しててもいいですか？」

言い方も声もいつもとんなら変わる様子もないのに、目つきや全身から正体不明の迫力が放たれているような気がする。僕はできるだけいつも通りに聞こえるよう、「ああ、どうぞ」と応えた。

「ありがとうございます」

表情はとても柔らかな笑顔なのに、背筋にゾクッと悪寒が走る。彼女は無駄のない動きで原稿用紙を取り出し、執筆用のペンを筆入れから出すと一つ一つマスを埋め始めた。頭が前に落ちて、少々丸まった背中から黒いオーラが漏れ出ているような気がする。

森田さんとの打ち合わせは、この後一五時から。まだ三十分少々、彼女はそこで書き続けるだろう。オフィスの端に設定した打ち合わせスペースから、目に見えない緊張感みたいなものが全体に拡がっていく。

僕は資料を自分のデスクに積み上げ、締め切っていた窓に手をかけた。

「クーラーついでるのに」

窓を大きく開けた僕に、香織は不満げな表情を向ける。僕は「換気だよ」と答えながら、最近の空調を信じて、窓をもう一つ開けてみた。

初出 令和三年一〇月一二日 カクヨムにて公開

九月一五日（金）

哲朗と昼食を取っていると、彼は自分のスマホを僕に差し出した。先月の一朗さんのパーティーで撮影した集合写真と、去年の明子さんの誕生日会で誰かが撮った写真。集合写真の方は出席者全員に送られているが、もう一方は哲朗が撮った、もしくは持つているにしては微妙に違和感のある写真だ。

「コレを、上坂さんが見せて来た、と？」

彼にスマホを返しながら、哲朗の話を聞き返した。彼は、口を開けずに咀嚼しながら頷いた。

「え、彼女はどこかの職員？」

「女性のジェームズ・ボンドとか、そんな話題もあつたよね」

香織も昼休憩で暇なのか、隙があれば話に入り込もうと茶々を入れてくる。僕は「あつた、あつた」と話に乗りながら、「黒髪はともかく、アジア人女性のジェームズ・ボンドは無理がありすぎるだろ」と切り返した。

そもそも、ジェームズ・ボンドならフィクションの世界。「四次元の壁」やそれを越えて云々するお話は、あまり好みではない。

「そういうえば、駅前のビルに探偵の学校みたいな看板あるじゃない？」

香織は身振り手振りを交えて、駅向こうのデッキからそんな看板がいつも目に入ると訴える。僕も確かに見覚えがあるが、正確には「の」はなかったような。

それに――

「宝塚が地元の学生が、わざわざ通わないだろう」

「兄貴って、本当につまんないよね」

香織は哲朗に同意を求めたが、彼は乾いた笑い声を漏らし、曖昧にやり過ぎした。仮に接点があつたとしても、学校で学んだスキルのみで、ここまで情報収集するのは難しいだろう。

一朗さん関連の公開情報、同じ大学の卒業生という情報に、地元もそれほど離れていないという条件も加わるが、それらを駆使しながら必要なネタを引っ張ってくるのは、彼女の才能だろう。

個性的ではある物の、コミュニケーション自体は非常に高く思えるし、硬軟織

り交ぜた交渉術、人たらしのスキルも高い気がする。そこに、文章の奥に秘められていたような、底知れない黒い何かが加われば、探偵というか、何らかの作業員、エージェントというのも向いているのかも知れない。

「随分と厄介な人物に好かれたんだな」

「好かれているとか、そういうのは——」

哲朗は慌てて取り繕う。言葉数を増やされても、耳にも頭にも中身が入っていない。上坂さん自身にも、そういう感情はあんまりないのだろう。若さ故の悪い病気みたいなものと、高スペック、高スキルだけに、どんな男でも墮としてやりたいプライドでもあるのだろう。

哲朗も若さ故に翻弄されてはいるものの、根本的なところで突き放している節がある。そう簡単に心を変えない頑固さが、逆に有能なスパイの心に火をつけたのか。

不意に、卓上の電話が鳴り出した。慌てて受話器を取ろうとするが、香織が手で僕を制しながらスツと立ち上がり、外向けの声を作って電話に出てくれた。お得意さんからの電話なのか、香織と二人で楽しそうに喋っている。

「えーっと、朋子さんから。一番ね」

香織は受話器を胸に押し当てて、僕に言った。僕は「了解」と、小さくまとめた弁当を持って立ち上がった。哲朗は慌てて、弁当の残りを掻き込んでいる。

ちよつと早いけど、昼休憩はここまで。デスクに置きっぱなしだったコーヒード喉を湿らせ、受話器を片手に赤く光っているボタンを押した。

初出 令和三年一〇月一四日 カクヨムにて公開

一〇月二五日(水)

笠井さんとコーヒーを飲みながら、哲朗が来るのを待っている。僕はアイスコーヒーを飲み、笠井さんはホットコーヒーを飲んでいる。彼はカッターシャツの上にベストまで着込んでいた。

「すっかり冬の装いですね」

僕に比べれば厚着の彼に、僕はそう言った。彼は苦笑いを浮かべながら、「いやいや、コレはそこまで分厚くないですから」とベストを摘みながら言った。

「週末ぐらいから、また冷え込むって言ってましたよ」

「もう十一月ですもんね」

多少寒くてもあまり厚着をしない僕でも、流石にそろそろジャケットやコート  
を羽織らないとダメかもしれない。日中の日向はまだまだ暑い分、朝夕の冷え込みとの落差が体に堪える。

笠井さんは自分のシステム手帳を見ながら、何かを言おうと顔を上げた。その顔の奥に、哲朗の姿が見える。僕は椅子から立ち上がり、手を振った。哲朗は小走りですぐに近づいてくる。

僕は財布を握ってレジの方を指しながら、「なんか頼む？」と彼に尋ねる。哲朗は空いている椅子に腰を下ろさず、「いえ、すぐに戻らなきゃいけないんで」と言った。

「そっか、そっか。じゃあ、とりあえずコレ」

立ったままの彼に、椅子に腰を下ろしたまま半分に畳んだA3用紙を差し出した。

「再来月はコレで決まりそうだから」

哲朗はA3用紙を開き、横長の紙にザッと目を通す。

「了解しました。で、コレだけですか？」

哲朗は再び用紙を半分に畳んで持ち、ゆっくりとした口調で僕らに確かめる。僕は頷きながら、「忙しいのに、ごめんね」と答えた。

「データで送ってもらえば良かったのに」

「せっかく印刷してもらったからさ。それにコッチがついでだから」

僕は真新しいクリアファイルも哲朗に差し出した。彼はそれを受け取ると、

「じゃあ、戻りますよ？」と確かめ、僕が頷いて返すと、「じゃあ、失礼します」と資料をクリアファイルに入れ、来た時と同じような小走りであつた道を戻って行った。

「なんか、すみません。僕がランチしましょうと言ったばかりに」

笠井さんは椅子に座ったまま深々と頭を下げた。

「いえいえ、気にしないでください。そういうのも大事じゃないですか」

忙しそうな哲朗には申し訳なかったが、たまにはこうなってしまう日もある。

彼には後で何らかのフォローを入れておけば何とかなる。

「そういえば、さつき何か言おうとしてませんでした？」

僕は、哲朗が来る直前の笠井さんを思い出し、彼に訊ねてみた。彼は「ああ」と再びシステム手帳を開きながら、「来週一日、息子さんの誕生日ですよね？」と言った。

「え、そんなことまでメモしてくれてるんですか？」

「ええ、まあ。大したことじゃないんですけど」

笠井さんは謙遜するが、彼の付き合いを考えると、膨大な量のメモがあの手帳には書き込まれていることになる。その量を想像するだけでも気が遠くなるが、彼はそういうのが得意そうなものもなく分かってしまう。

「中学一年生、でしたっけ」

「そうです、そうです」

笠井さんは「いやあ、若いなあ」と声を漏らしながら、システム手帳をゆつくり閉じた。

「将来の進路は」

「いや、まだまだ全然」

「そうですか。娘さんも優秀だからな」

智希も陽菜も、直接笠井さんとの面識はなかったはずだけど、彼は色んな情報を整理して、彼や彼女らを想像しているように見える。この細かさがあればこそ、か。せめて薄手のベストかホットコーヒーぐらいは見習わなきゃ……。

初出 令和三年一〇月二七日 カクヨムにて公開

一月二一日(土)

久々に午後からオフの土曜日なのに、リビングには何となく緊張感が漂っている。普段なら僕が帰宅するまで食卓でゲームに勤しんでいる智希が、今日は晩ご飯を終えるなり自分の部屋に引き揚げていた。

キッチンで食器を片付けながら、史穂が壁の時計をチラチラ見ている。彼女の鋭い目つきが、リビングに緊張感をもたらしているようだ。僕はできるだけ平静を装い、彼女が入れてくれた食後のコーヒーを飲みながら、普段はあまり見ることがないテレビをぼんやり眺めている。興味深いという気持ちや新鮮さがなくはないものの、気もそぞろに僕も時計の方が気になっていた。

食卓に置いていたスマホが鳴った。画面を見ると、哲朗からの通話。普段はほとんど文字のやり取りなのに、珍しい。僕は史穂に哲朗からの電話だと伝え、スマホを持ってリビングから掃き出し窓を開けてベランダに出た。夜風に何か一枚羽織れば良かったと思いつつ、ゆっくり窓を閉めて電話に出る。

「遅くにすみません。LINEより電話の方がいいと思って」

電話の後ろが若干賑やかだ。声の後ろで色んな音が行き交っている。

「全然いいよ。で、どう？」

「今、そっちへ行くバスに乗ったんで、よっぽどでなければ間に合うと思います」  
ベランダから家の中を覗いて、時計を確かめる。もうそろそろ、二〇時一五分といったところ。

「JRだっけ？」

僕の問いかけに、哲朗は「そうです、そうです」と答えた。東口のバス停から乗ったら、まあ、何とかなるか。家の中を見ていると、史穂が食卓に置いた自分のスマホを手を取っている。

僕は心の奥底でゆっくり胸を撫で下ろし、夜空を見上げた。

「半日、密偵みたいなことさせて悪かったね」

「いえいえ。タダでライトアップ見れて、いいリフレッシュができました」

「それは良かった」

哲朗は、「じゃあ、また月曜日」と言い、僕は「ああ、おやすみ」と返した。

哲朗からの返事を聞いて、通話を終えた。ベランダより少し暖かい室内に戻る。

「なんだったの？」

史穂は「哲朗くんから、こんな時間に電話なんて珍しい」と食卓を拭きながら付け加えた。僕は「いや、別に。仕事の話」と適当にお茶を濁すと、彼女はそれ以上追求してこなかった。

史穂は食卓を拭き終わると、息をつく暇もなさそうに、納戸の方へ向かった。扉を開け、掃除機を引っ張り出す。僕は彼女に「ああ、いいよ。オレがやる」と掃除機を受け取った。

「そう？　じゃあ、お願い。終わったら、ウエットシートで床拭きもよろしく」

僕は「りょくかい」と返事をして、とりあえずリビングまで掃除機を持っていく。

「あと、智希の部屋まで行ったら、お風呂の準備もお願いしてきて。本人も分かっていると思うけど」

「ほくい」

僕の返事を聞く前に、史穂は食卓に戻り、家計簿をつけ始めた。普段は、こういう掃除も陽菜や智希がお手伝いしてくれているのだろう。四角いところを丸く掃かないように気を付けながら、掃除機を動かす。

家具の下や絨毯の上の埃も逃さないように、腰をかがめたり、物を避けたりしながら反復運動を繰り返す。コードの長さやベストな電源の位置、本体の動きも我ながら全然分かっていないなと思いつつ、このまま平穏な土曜日が終わりますようにと心の片隅で祈っていた。

初出 令和三年一月二日 カクヨムにて公開

一月二〇日(月)

この二、三日ずっと嗅いでいるような匂いが、急に漂ってきた。今日こそはあの匂いと距離を置くつもりだったのに、オフィスに備蓄しているカレー味のカップ麺に、哲朗がお湯を注いでいる。

「私も、カレーにしようかな」

哲朗の姿を見ていた香織も、同じカップ麺を手に取り、お湯を注いだ。同じ匂いが、微妙に違う角度から漂ってくる。その匂いに若干辟易しているのが顔に出ていたらしく、香織に怪訝な表情を向けられた。

「どうしたの？ カレー嫌いだったっけ？」

「あ、いや、そういう訳じゃ」

一足先に出来上がったらしい哲朗は、僕の方を気にかけてながら蓋を開け、箸でよくかき混ぜる。香織も「変な奴」と言いたげな表情を浮かべながら、哲朗の後に続いてカップ麺を食べ始めた。

普段なら自分も匂いに釣られてしまうが、自宅でも外でも偶然とは言えカレーが続いてしまうと、流石に嫌になってきた。少々肌寒いけど、オフィスの窓を開け、そこら中に漂っているカレーの匂いが外に出ないか期待してみる。

打ち合わせスペースで同じカップ麺を向かい合って食べながら、香織は合間に

哲朗への質問を織り交ぜる。

「そう言えばさ、哲朗のお袋の味って何？」

彼は想定外の質問だったのか、「え？」と一瞬詰まると、答えを探して言い淀む。

「何かないの？ それこそカレーとか、唐揚げとか」

「実家に帰った時に出てくるとしたら、ローストビーフとかステーキとか。でも、あんまりお袋の味って感じはしないですね」

哲朗の回答に、香織は「何それ、変なのー」と笑って茶化した。

「実家にいた時も、カレーは滅多に出なかったかな。レトルトとかは、こっそり隠れて食ってましたけど」

香織は「ふーん」とさつきよりは真剣な面持ちで話を受け止めている。

「じゃあ、うちのカレーはコレ、みたいなものないんだ」

「全くないっすね。こつちに来てからも、一回も作ってないかな」

「一人暮らしだと、そうだよな。良ければ今度、招待しようか？」

香織の提案に、哲朗は「え、良いんすか？」と思わぬ反応を見せた。すぐに良い反応が返ってきて一瞬驚いていた香織だったが、すぐに何か悪いことを思っていたのか、影のある表情を浮かべながら、「じゃあ、また調整して声かけるね」と言った。哲朗は素直に、それに応じようとしている。

僕は彼らの間に割って入った。

「香織のカレーも良いんだけど、コレは行った？」

哲朗に、イベントのチラシを差し出した。ウチも少しだけお手伝いして、イベントの概要や中身もある程度把握しているであろう、万博で現在開催中の、カレーの祭典。哲朗は気の抜けた声で、「ああ、例の」と呟いた。

「武藤さんは初日に行っただんですっけ？」

「マジで美味いカレーも、ちゃんと知つとかないと」

哲朗は僕の圧に負けたのか、それともとりあえず受け流そうとしているのか、相変わらず気が抜けた調子で、「ああ、はい」と相槌を打った。哲朗の隣からチラシを覗き込んでいた香織が、「二三日もやってるんだ」と言った。

「子供らと行ってこようかな。哲郎も、一緒に行く？」

「行きたいのは山々なんですけど、その日はバタバタで」

哲朗の答えに香織は顔を背け、彼には見えにくいところで小さく舌打ちをした。どうやら何かのあてが外れたらしい。

「あ、でも別の日に行きますよ。皆さんの応援にも行きたいし」

哲朗は香織の思惑など微塵も気にならない様子で、明るい表情を浮かべて言った。こういう男が近々行きますんで、現地のルミちゃん、スタッフの皆さん、もう一踏ん張りしてください——。

初出 令和三年一月三日 カクヨムにて公開

一二月一四日(木)

寒空の下、小野寺さんを解放しながら笠井さんと共にゆっくり歩いている。前にもこんなことがあった気がするけど、アレは去年の出来事だったか、今年の出来事だったか、記憶が定かではない。

「いつもすみません」

小野寺さんが僕と笠井さんの間で、鼻声になりながら謝った。

「全然、気にしないでください」

笠井さんが男前な表情で言うが、明るさと角度的に小野寺さんには微塵も見えていないだろう。笠井さんの決め顔に、笑いを堪え切れず軽く吹いてしまった。彼にはバレないように顔を逸らし、気持ちを落ち着かせるべく、一呼吸置く。

「そうそう。ルミちゃんのはしゃがない忘年会なんて、物足りないって」

不意に小野寺さんが目を輝かせながら、僕を見上げた。

「ハメを外して飲み過ぎるアラサー女でも、大丈夫ですか？」

彼女は若干のアルコール臭を漂わせながら、心配そうな面持ちで言う。ついつい、「ルミちゃん」とちゃん付けで呼んでしまうけど、そう言えば良い歳なんだっけ。相対的に若い部類に入るけど、アラサーであればそろそろ自分なりの頃合いつてやつを覚えてもらっても良い気もする。

答えに窮して笠井さんの方へ視線をやるものの、彼には華麗にスルーされてしまった。こういう時に安易に助け舟を出してくれないところが、彼の魅力でもある。

「まあ、いつもだと困るけど、たまになら」

「本当に？」

僕は勢いで、「本当、本当」と応えた。何が「本当に」なのかは分からないが、彼女がそれで落ち着くのなら、今はそれで良い。小野寺さんはそれつきり、再びグロッキー状態に戻って、僕らに身体を預けながらトボトボ歩いている。

「若い人も増えて、賑やかになつて来ましたよね」

笠井さんが前を向いてボソツと言った。

「まあ、半分身内みたいなもんですけど」

「それでも、良いじゃないですか」

笠井さんは笑顔で言った。

去年もそれなりの規模感だったけど、今年は輪をかけて多くの人が集まってくれた。哲朗や小野寺さんらを中心に、森田さんより若い人たちも沢山来てくれた。オジさんやオバさんの集まりじゃなくなって、随分華やかな集まりにもなりつつある。

「食事のメニューも、当日の催しも、そろそろ再考しないとダメですね」

「そうですね。新年会は間に合わないですが、次々回ぐらいから若い人の意見も取り入れていかないと」

ついこの間まで、森田さんより若いのは哲朗ぐらいのもんだったのに、安藤さんのところも合流すると、森田さんですら一気に上の世代へ押し上げられてしま

う。

「僕らもいつの間にか、年寄りですよ」

僕は「若い人の意見」と言った笠井さんの言葉に、つい反応してしまった。彼に笑いながら言うと、彼も「そうですね」と笑い返す。

「まだまだ若輩者のつもりなんですけどね」

「僕もですよ」

二人で穏やかに笑い合っていると、真ん中の小野寺さんが微妙に揺れた。二人揃って身構えたが、彼女は何事もなかったかのように落ち着きを取り戻し、元のペースで足を動かし始めた。笠井さんと同じタイミングで、ふうと息を吐く。

顔を正面に向けると、向こうの方に平和堂の看板と信号が見えてきた。もうそろそろ、目的地。再びデジャヴを感じながら、後少しだと自分に言い聞かせた。

初出 令和三年一月一五日 カクヨムにて公開

二月三十一日(日) 午後六時

おせちを作るのに邪魔だからと、昼過ぎから家の中にいた智希と共に追い出された。年末にやることと言えば洗車だろうと、割安のセルフの洗車場へ行ってみると、考えることはみんな一緒だったらしく、我々と同じような親子連れでこつた返していた。

混み合っている中、なんとか男二人でザッと掃除して戻ってきたものの、まだ少し早い気もして、寒いのを我慢しながら車の中を片付ける。ザッとゴミを拾って、ハンデイの掃除機で拾い切れない汚れを取る。智希には硬く絞った雑巾で車内を手当たり次第拭いてもらった。陽も暮れてきたし、「適当でいいぞ」と智希に声をかけて掃除を打ち切った。

掃除するために引っぱり出した道具を、一つ一つ元の場所へ片付けていると、門を開く音が響いた。智希が、「おかえり」と声をかけている。

「おかえり。早かったな」

玄関前には、コートとマフラーを付けた陽菜が立っていた。彼女は僕へ返事をすることなく、こちらを一瞥して家の中へ入って行った。僕がぼんやり突っ立っていると、智希がバケツや掃除機を持って、「お父さん」と声をかけてきた。

「おお、ありがとう。中へ入ろう」

僕がドアを開け、智希を先に中へ入れた。彼が靴を脱ぐスペースを確保しながら、後ろ手にドアを閉める。家の中とはいえ、玄関や廊下は少し肌寒い。掃除用具の収納は智希に任せ、僕は一旦リビングへ向かう。

陽菜は自分の部屋に籠っているらしく、リビングにその姿はなかった。

「あら、おかえり」

史穂はまだ、キッチンで忙しそうにしていた。換気扇を全力で回しながら、点けっぱなしの年末特番を時折眺めている。音量を上げないと満足に聞こえないだろうに、一度、「余計なお世話だ」と言われて以来、何もしないようになっている。

時計を見上げると、午後六時。晩ご飯やら紅白やらには、まだ少し早い。キッチンの稼働状況や食卓の上に並んだ大小様々なタッパーを見る限り、もうしばらく外に出ていた方が良さそうだ。

いつの間にか洗面所で手を洗ってきたらしい智希が、微妙に濡れた手を乾かすように、鍋が上に乗ったストーブの前に行く。史穂に嫌な顔をされながらも、そこで暖を取りながら時計を見上げる。

「あ、テデイの散歩」

智希が呟くまで、すっかり忘れていた。夕方の散歩がまだ終わっていない。智希は手慣れた手付きで散歩に必要なものを用意する。リードを持って、テデイのケージがある上の階へ、階段を上がって行つた。

「陽菜も一緒に連れて行つたら？」

史穂は手を動かし、鍋の状況を確認ながら言った。

「手伝わせなくても良いのか？」

僕の問いに、史穂は「邪魔にしかならないから、連れて行って」と言った。何がなんでも、つてことらしい。

僕は先の上へ行つた智希の後を追いかけて、子供部屋の方へ上がる。階段の向かいの部屋からテデイを抱えた智希が出てきた。彼は隙あらば逃げ出そうとするテデイを上手に制しながら、「アレ？」と僕を見て言う。

「お姉ちゃんも連れて行けつてさ」

「ふーん。じゃあ、先に降りてるからよろしく」

彼はテデイを抱えたまま、慎重に階段を降りていく。僕はその後ろ姿を見送りながら、陽菜の部屋のドアを三回ノックした。

(完)

初出 令和三年一月二四日 カクヨムにて公開